

「陸軍の軍縮と軍国化への道」関係年表

3	1870	10. 2 兵制統一。陸軍は仏式、海軍は英式	11	1921	11. 4 原敬首相、東京駅で暗殺される
5	1872	6. 27 兵学寮の中に幼年学校			11. 12 ワシントン会議始まる
6	1873	1. 10 徴兵令を公布。常備軍制度確立			12. 13 「5・5・3」の海軍軍縮基本合意。日米英 仏四国条約調印(日英同盟廃棄)
		6. 8 陸軍卿に山県有朋			
11	1878	6. 10 陸軍士官学校、市ヶ谷に開校	11	1922	2. 1 山県有朋死去
		12. 5 参謀本部を設置。初代本部長に山県			2. 6 ワシントン条約調印
15	1882	1. 4 軍人勅諭を發布			3. 25 衆院、陸軍軍縮を求める建議案可決
16	1883	4. 12 陸軍大学校開校			6. 12 加藤友三郎内閣成立
		12. 28 徴兵令改正。現役・予備役・後備役制			8. 15 陸軍5万9千人を整理(山梨軍縮)
18	1885	3. 18 陸大講師に独メッケル少佐来日			10. 25 日本軍、シベリアからの撤兵完了
		12. 22 内閣制度制定。初代首相に伊藤博文	12	1923	2. 23 普通選挙を求め3万人が示威行進
20	1887	6. 14 陸軍幼年学校として独立			9. 1 関東大震災
22	1889	2. 11 大日本帝国憲法公布			9. 2 加藤友三郎死去で山本権兵衛内閣
23	1890	7. 1 第1回総選挙			9. 16 甘粕正彦大尉、大杉栄ら虐殺
27	1894	8. 1 清国に宣戦布告。日清戦争始まる			12. 27 虎ノ門事件。山本内閣総辞職
29	1896	3. 16 全国に近衛および12個師団を置く	13	1924	1. 7 清浦奎吾内閣発足。陸相に宇垣一成
		5. 15 陸軍幼年学校、中央1校地方に6校			1. 18 憲政会、政友会、革新倶楽部の3党首 会談で護憲三派成立。第2次護憲運動
31	1898	1. 12 陸相に桂太郎(44. 8. 30まで児玉源太 郎、寺内正毅と長州で陸相独占)			5. 10 総選挙で護憲三派勝利
		6. 30 初の政党内閣・大隈重信内閣成立			6. 11 護憲三派・加藤高明内閣成立(政党内 閣制、二大政党時代始まる)
33	1900	5. 19 官制改正。陸海軍大臣現役武官制			
		9. 15 立憲政友会結成。総裁に伊藤博文	14	1925	3. 19 治安維持法成立(4. 22公布)
35	1902	1. 30 日英同盟調印			3. 29 普選法案、衆院、貴族院で成立
37	1904	2. 10 ロシアに宣戦布告。日露戦争始まる			4. 13 陸軍現役将校配属令公布(学校教練)
38	1905	9. 5 日露講和条約調印			5. 1 4個師団廃止の「宇垣軍縮」実施
40	1907	4. 4 帝国国防方針を制定	15	1926	4. 20 青年訓練所令公布
		9. 18 陸軍19個師団(戦時員4個師団のみ2個師団新設)			10. 1 陸軍省に整備局。永田鉄山、動員課長
43	1910	11. 3 帝国在郷軍人会が発会式	16	1927	4. 1 徴兵令を改め兵役法公布
45	1912	4. 5 西園寺公望内閣陸相に上原勇作	3	1928	2. 20 普選法による最初の総選挙
		7. 30 明治天皇崩御			6. 4 関東軍河本大作大佐、張作霖爆殺
1	1912	12. 2 上原勇作陸相、西園寺公望内閣に2個 師団増設要求を拒否され単独辞表	4	1929	5. 19 永田ら陸大卒将校で「一夕会」結成
		12. 5 西園寺内閣総辞職。大正政変始まる	5	1930	4. 22 ロンドン海軍軍縮条約調印
2	1913	2. 10 民衆が国会包囲。桂首相総辞職決断	6	1931	9. 18 関東軍、柳条湖で満鉄爆破。満州事変
		6. 13 山本権兵衛内閣、軍部大臣現役武官 制を改正し予備役、後備役任用の道	7	1932	3. 1 満州國建国宣言
3	1914	7. 28 第1次世界大戦始まる	10	1935	5. 15 五・一五事件。犬養毅首相射殺される
		8. 23 日本、ドイツに宣戦布告。大戦参加	11	1936	8. 12 永田軍務局長、相沢三郎中佐に斬殺
4	1915	6. 9 衆院で2個師団増設の追加予算可決			2. 26 二・二六事件
6	1917	3. 15 露に臨時政府。ロマノフ王朝滅亡	12	1937	5. 18 陸海軍大臣の現役武官制復活
7	1918	8. 2 寺内正毅内閣、シベリア出兵を宣言			1. 25 宇垣に組閣の大命(29日駁)
		9. 29 米騒動で寺内内閣倒れ原敬内閣発足	14	1939	7. 7 盧溝橋で日中両軍衝突。支那事変
		11. 11 ドイツ降伏。第1次世界大戦終わる			5. 11 日ソ両軍衝突。ノモンハン事件
8	1919	1. 18 パリ講和会議始まる(～6. 28)	15	1940	9. 1 第2次世界大戦始まる
		6. 1 朝鮮に第20師団開設。21個師団体制			9. 23 日本軍、北部仏印へ進駐
9	1920	4. 7 株式大暴落。戦後恐慌始まる	16	1941	9. 27 日独伊三国同盟調印
10	1921	10. 27 「バーデン・バーデンの密約」	17	1942	12. 8 太平洋戦争始まる
			20	1945	8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始
					8. 15 戦争終結の玉音放送

「陸軍の軍縮と軍国化への道」メモ

- 海軍軍縮は、陸軍にも軍縮を求める強い世論
 - ▽ワシントン条約(大正11年2月6日)で日本は主力艦について「五・五・三」を受け入れた
 - ▽第一次世界大戦が終わり 平和待望論 深刻な 戦後不況も 始まっていた
 - ▽首席全権 加藤友三郎海相は 世界の 大勢 日本の 国益を 判断し 海軍軍縮に
- 陸軍は世論に押される形で、2回(大正11年、14年)にわたり9万3千人余りの兵力を削減した
 - ▽明治国家誕生以来「富国強兵」を合言葉に 拡張に 拡張を重ねてきた 陸軍の 歴史では 初めての ことであり 画期的な ことだったが…
 - ▽その裏では 中学校以上の 学校に 軍事教練 など 軍国化 路線が 着々と 敷かれて いた
 - ▽この 筋書きを 作り 実行に移した のは 大正13年1月 陸軍大臣 になった 宇垣一成
- ワシントン会議では、陸軍協定は出来なかった
 - ▽陸軍は 事前打ち合せの 外務・陸海軍次官 会議で 「一兵たりといえども 減らさない」と 強硬方針
 - ▽会議では フランス全権が 陸軍縮小に 反対
 - ▽海軍は 平時の 軍艦の数と 性能を 制限しておけば 戦争になったから 急いで 建造できない
 - ▽陸軍の場合は 平時兵力を 減らしておいても 簡単に 戦時動員できる 意味がない となった
 - ▽これが 国内世論を 反発させた
 - ▽陸軍が 盛んに 唱えていた ロシアの 脅威も 帝政ロシアが 革命で 倒れ 当面 大きな 軍備を持つ 理由が なくなっていた
 - ▽元老の 山県有朋が 亡くなる(大正11年2月1日)と 陸軍は 政党の 集中砲火を 浴びることになった
 - ▽野党憲政会 国民党に 続いて 与党政友会も 「陸軍の 整理縮小に 関する 建議案」を 提出 「歩兵の 在営期間を 一年四か月に 短縮し、且 各種 機関を 統合して 年間経費 四千万円を 節減せよ」
 - ▽山梨半造陸相も 「陸軍も 整理を 検討中である」
 - ▽衆議院は 3月25日 建議案を 圧倒的多数で 可決

加藤 友三郎(かとう・ともさぶろう)

文久1(1861)～大正12(1923) 広島・安芸藩出身。海軍大将。明治38年連合艦隊参謀長。大正4年大隈内閣海相となり寺内・原・高橋内閣に留任。11年2月ワシントン会議全権として海軍軍縮条約調印。6月海相兼務のまま首相に就任、陸海軍軍縮、シベリア撤兵を達成。在任中に病死し、死後元帥の称号を贈られる

宇垣 一成(うがき・かずしげ)

明治1(1868)～昭和31(1956) 岡山県生まれ。陸軍大将。大正2年、陸軍省軍事課長の時、山本内閣の「軍部大臣現役武官制」廃止に反対、怪文書を撒いて一時左遷される。参謀本部作戦部長、陸軍次官を経て13年1月清浦内閣陸相。加藤高明・若槻内閣にも留任し4個師団廃止の宇垣軍縮を実施。陸軍近代化を進め、学校教練、青年訓練所制度を導入した。昭和4年浜口内閣陸相、陸軍に宇垣時代を築く。6年朝鮮総督。12年1月組閣の大命を受けたが、陸軍中堅幹部の反対で断念。13年近衛内閣外相。戦後28年、参院選全国区最高点当選。著に「宇垣一成日記」

山県 有朋(やまがた・ありとも)

天保9(1838)～大正11(1922) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。松下村塾に学び、奇兵隊軍監。明治2年欧米を視察、帰国後、陸軍大輔を経て6年陸軍卿となり軍制、徴兵制を確立。参謀本部長、内務卿を歴任。18年伊藤内閣内相となり、陸軍と内務官僚の支配権を握る。22年首相。枢密院議長を経て日清戦争で第1軍司令官。31年再び首相となり軍部大臣現役武官制を実施。日露戦争では参謀総長。元老として長州閥を率い、陸軍、政界に君臨

●政権も目まぐるしく変わっていた

▽原敬首相が 東京駅で暗殺(大正10年11月4日)され
高橋是清内閣も 政友会内紛で 総辞職
首相には 大正11年6月12日 加藤友三郎
▽最初の閣議で「軍縮の準備が出来次第、
次の議会の召集を待つことなく実施に移す」

●「山梨軍縮」は8月15日から実施された

— 師団を減らさずに兵隊の数を間引き —

21個師団はそのままにして、大隊の中隊編成を縮小した。歩兵連隊は3大隊、各大隊は4個中隊。これを3個中隊編成にして220中隊減らし、将校2168人、下士官兵5万7296人を整理した。作戦の基礎となる師団さえ減らさないでおけば、戦争になった時、兵舎などの施設があるから動員兵を教育・訓練することができ、21個師団を42個師団にするのも比較的簡単だった。
兵役関係では、現役兵の入営時期を遅らせて40日縮減、予備役以後の演習召集を47日短縮、全兵役期間を通じて87日間減らした。

▽陸軍は「5個師団分に相当する」と説明
経常費で 年平均3145万円
臨時費456万円 減らすことが出来るとした
▽議会側には「手緩い、不徹底だ」と 大きな不満

…… 「山梨軍縮」の方針 ……

「兵隊を減らす代わりに、兵器、装備の近代化を図る」を基本方針とした。歩兵1連隊に2機関銃隊を新設し、野戦重砲兵、鉄道兵、通信兵、航空兵を増員。さらに軽機関銃、歩兵砲、高射砲、自動車牽引重砲の兵器増強経費9613万円を12年継続事業として要求、成立させていた。

▽兵器増強費を差し引くと 大正12年度予算でも
陸軍の経費節減は 約2300万円に止まった
▽軍縮実績も 海軍22.7%減(前比) 陸軍6.5%

●宇垣は、軍縮には大反対だった

▽山梨を「下手な舵取りだったからだ」
▽山梨は 田中義一と 士官学校同期生

山梨 半造(やまなし・はんぞう)

元治1(1864)～昭和19(1944) 神奈川県生まれ。陸軍大将。大正7年陸軍次官、10年高橋内閣陸相。昭和2年朝鮮総督となったが、朝鮮疑獄事件に連座し辞職

原 敬(はら・たかし)

安政3(1856)～大正10(1921) 盛岡南部藩出身。外務省商務局長、次官を歴て明治35年衆院議員に当選。通信相、内相を歴任、大正2年政友会総裁。7年初の純政党内閣を組織、「平民宰相」として世論の支持を受けたが東京駅で暗殺される

高橋 是清(たかし・これきよ)

安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し大正10年11月、原首相の暗殺で政友会総裁、首相に就任。昭和2年田中内閣蔵相となり金融恐慌を収拾。満州事変後に犬養・斎藤・岡田内閣蔵相。世界恐慌の危機を乗り切る。二・二六事件で暗殺される

— 宇垣日記(大正11年8月15日) —

「明治建軍以来、増設に次ぐ拡張を以てして今日に至りし陸軍にとって、時勢の変遷とはいえ之を縮小せざるに至りし事は悲しまざるを得ず…八月十五日、これが余が今日迄の軍人生活に於ける第一の不快なる日である。第一に悲しむべき日である。第一の憾むべき日である」

田中 義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929) 長州藩出身。陸軍大将。参謀次長としてシベリア出兵を推進。大正7年原内閣陸相となり高橋内閣に留任。12年山本閣陸相。14年政友会総裁。昭和2年首相に就任したが張作霖爆殺事件で辞職

▽田中の引き立てで 次官 陸相に
宇垣は「長いものに巻かれの、権勢に媚びる利己主義者。軍縮をやれといわれて、ただそれに従って兵力削減の帳面を合わせただけだ」
▽「山梨軍縮」は 軍縮そのもの
大戦の教訓を生かした 陸軍近代化
整備・充実には「何の役にも立っていない」

●ヨーロッパの血みどろの近代戦を経験しなかった日本陸軍は、三流、四流の旧式装備のまま取り残された

▽フランスの歩兵大隊は
重機関銃4挺 軽機関銃12挺を装備
日本の歩兵部隊には 1挺もない
▽飛行機も 戦闘機 偵察機だけ 爆撃機がなかった
▽近代化とは 動力化 機械化で 機動性を持たせる
大砲を車で引っ張り 自走砲(轎 野車)
▽金のかかることばかり

飛行1個連隊(30~40機)を作っても
維持費だけで 1個師団分の経費

▽「山梨軍縮」は 兵力削減で 世論の風当たりを
かわそうとしたため 近代化は 不十分なものに

●軍縮と共に「軍人失意の時代」が始まっていた

▽電車の中で「拍車をとれ マントを脱げ」
あげくは「税金泥棒」と 罵られる
▽日露戦争の頃は 軍服姿で 街中を歩けば
誰もが 畏敬の念で 見てくれたのに
将校が帰宅する時には 背広に着替えた
▽軍縮で クビになれば
地方人(職での一般社会人の職)に 頭を下げなければ…

●関東大震災で首都復興、経済再建最優先

▽緊縮財政の中 どうやって 復興財源を確保するか
軍縮を求める声が 一段と 強まること
▽そんな中 宇垣陸相(加藤高明内閣)は 大正14年5月
4個師団を廃止する「宇垣軍縮」を実施した
▽宇垣が この後「政界の惑星」と騒がれ
何度か 首相・総裁候補に 挙がるのも
厳しい環境の中で 軍縮を実行した手腕
「宇垣は出来る」「宇垣なら陸軍を抑えられる」

—「砲兵は耕し歩兵は収穫する」—

第一次大戦は、それまでの戦争の観念を根底から引っ繰り返した。飛行機、戦車、毒ガスと新兵器が登場したが、何と云っても大砲と機関銃。砲密度(砲隊あたりの砲)は、日露戦争当時3、4門、砲弾発射数も1日1門3、4発だったのが、20門から30門に増えた。1門30発を超える集中砲撃で敵陣地を制圧すると、突撃分隊に機関銃を撃たせながら突入させた。

日本陸軍は日露戦争以来白兵戦、銃剣突撃主義。散兵戦(散兵隊)で一斉射撃の後、小隊長が先頭に立って「俺についてこい」と突撃する戦法。これでは大砲、機関銃の餌食になるだけ。戦法も指揮も機関銃を中心とした小人数のグループ戦闘に変わっていた。

—「軍人お断わり」の時代—

第15師団長(淵田)田中国重は、参謀総長上原勇作元帥への手紙で、「軍縮の声が世に喧伝されてから隊付将校の士気は大いに阻喪した。最近の青年将校の配偶者の家柄を見ても、昔と比べて大いに低下している」

中外商業新報(現日経新聞)は結婚補導会による男女の結婚傾向のデータを紹介、結婚相手の希望として女性は「何業でもよいが、軍人だけはお断わり」男性は「実業家か医者か学者の娘が一番だが、軍人の娘だけは不可」

田中 国重(たなか・くにひら)

明治2(1869)~昭和16(1941) 鹿児島県生まれ。陸軍大将。駐米・駐英武官、第15師団長、台湾軍司令官を歴任

上原 勇作(うえはら・ゆうさく)

安政3(1856)~昭和8(1933) 宮崎県都城生まれ。陸軍大将・元帥。明治14年から4年間フランスに留学、工兵技術を導入。

▽震災で 軍隊を見直す空気も 出ていた
陸軍は 復旧の先頭にたち 備蓄食糧を放出

●「宇垣軍縮」は、軍隊が国民の新たな信頼を獲得した
機会を巧みにとらえ、先手を打ったものだった

「羊頭狗肉」の「宇垣軍縮」

「羊頭」は4個師団。日露戦争後に作られた第13(高田)15(豊前)17(岡山)18(久米)師団を、一挙に廃止し、インパクトは強烈だった。誰もが軍縮だと受け取ったし、加藤内閣もそう説明した。

しかし師団を減らさなかった「山梨軍縮」は、5万9400人減らしたのに「宇垣軍縮」は3万3900人。陸軍費は大正15年度こそ1億9700万円と前年度より1800万円減ったが、昭和2年度はもう2億1800万円で、2100万円も増えている。

師団を減らして浮いた金は、全て陸軍近代化に充てられた。航空兵科が初めて作られ、航空本部が発足、飛行2個連隊が増設された。第7飛行連隊は軽爆2個中隊、重爆1個中隊から成り、ようやく爆撃隊が揃った。戦車隊も1個中隊でき、歩兵分隊に軽機関銃、歩兵連隊には歩兵砲が配備され、遅滞きながら近代化への第一歩。

若い頃から野心に燃えた軍人

宇垣は明治元年、岡山県の農家の五男坊として生まれた。生後3か月で父親が赤痢で亡くなり、12歳で母校の小学校の代用教員。教員検定試験に合格して16歳で校長に。生徒を引率、陸軍の演習を見学して軍人に憧れるようになった。宇垣家は戦国時代、1万3千石ほどの一城の主だったといわれ、反対する母親を説得、教員生活で貯めた資金を懐に上京した。

明治20年、20歳の時にフランス式からドイツ式に変わった新制度の陸士第1期生に合格。同期の白川義則、鈴木庄六も小学校教員出身。陸士での評価は「ずばらで無頓着」、あだ名が「鈍垣」。最古参の中尉として陸大に入った頃から頭角を現わし卒業成績は3番、恩賜の軍刀を受けた。28歳で結婚するとき「精神一到何事か成らざらん」の決意を示すため、奎次を一成と改

日露戦争で第4軍参謀長。45年西園寺内閣陸相。2個師団増設を要求して拒否され単独辞職。内閣を倒し、大正政変の因を作る。大正4年参謀総長。山県没後、反長州派の総帥として田中、宇垣と対立

関東大震災

大正12年9月1日正午直前、相模湾を震源とするマグニチュード7.9~8.2の大地震に襲われた。死者9万9331、不明4万3476、負傷10万3733人。全壊12万8千、半壊12万6千、焼失家屋44万7千戸。罹災者340万人で東京、横浜は壊滅状態。

損害は日銀調査で45億円を突破、当時の国民総生産の30%に当たる被害。

加藤 高明(かとう・たかあき)

万延1(1860)~大正15(1926) 愛知県生まれ。三菱に入社、岩崎弥太郎の知遇を得て英国留学。帰国後、三菱副支配人となり岩崎の女婿に。明治27年駐英公使。33年伊藤内閣外相。35年衆院議員。西園寺・桂内閣外相を歴任、桂と共に立憲同志会を組織。大正3年大隈内閣外相に就任し、第1次大戦で対独参戦し中国に21か条要求を出す。5年憲政会を組織して総裁。13年第2次護憲運動で護憲三派を結成して清浦内閣に対抗、首相に就任。普通選挙法、治安維持法を制定した。14年閣内紛争で憲政会単独内閣を組織したが、在任中に病死

白川 義則(しらかわ・よしのり)

明治1(1868)~昭和7(1932) 愛媛県生まれ。陸軍大将。関東軍司令官、昭和2年田中内閣陸相。上海派遣軍司令官で出征、天長節記念式で爆弾を投げられ死亡

鈴木 庄六(すずき・そうろく)

慶応1(1865)~昭和15(1940) 新潟県生まれ。陸軍大将。台湾・朝鮮軍司令官、大正15年参謀総長。昭和7年枢密顧問官

名したが、「日本一になるのを目指したんだ」といわれるくらい、野心に燃えた軍人だった。

- 大正13年1月7日、清浦奎吾内閣陸相に
▽軍縮について 自信満々

「自分のほかに、この大事業をやる者はいない」

- ▽前年9月 田中陸相から

軍制調査委員会の委員長に 任命され

近代化のプラン作りを 任されていた

宇垣の結論は「4個師団廃止」

宇垣は考えた。軍制の根本的改善を図るには巨額の費用を要する。財政状態を見るに、戦後の財界不況に喘ぎ、関東大震災の痛手を復興するだけでも非常な国庫負担だから、軍備改革にこれ以上の財政支出を求めるわけにはいかない。従って、改革に要する費用は全て部内から捻出しなければならぬ — 13年6月末、審議を終えた時は加藤高明内閣に代わっていたが、4個師団廃止で近代化費用を賄うことに。

- ▽8月 改革案を 元帥・軍事参議官会議に諮ると
参謀総長の上原勇作元帥から 猛烈な反対
「政党や世論に迎合し、陸軍を破壊するものだ」

- ▽賛成反対は 4対4 宇垣は

議長の上原元帥に迫って 多数決とさせ

議長賛成の1票で 辛うじて 押し切った

- 「宇垣軍縮」は大正14年5月1日から実施された

- ▽宇垣は「国防力を高めるための軍備の再編成だ」

- ▽近代化の点では ちょっぴり 前進しただけ

量的にも 質的にも

とても 自慢するようなものでは なかった

- ▽結局は 質も量も 足りない分を

「肉弾ヲ以テ砲弾二代エル」

体当り戦術思想に 固執せざるを得なかった

- ▽下村定大將は「宇垣軍縮の時、師団を半分くらいに減らしてしまう。陸軍を思い切ってコンパクトなものにして、浮いた経費を産業育成に充て、世界に遅れない最新装備を考えるべきだった」

清浦 奎吾(きゅうら・けいご)

嘉永3(1850)～昭和17(1942) 熊本県生まれ。明治19年内務省警保局長となり、保安条令を制定し山県内相の信任を得る。松方・山県・桂内閣法相を歴任、明治39年枢密顧問官。大正3年組閣の大命を受けたが、政党、海軍の反対で断念、「鰻香内閣」と評された。11年枢密院議長となり、13年1月首相に就任するも貴族院母体のため、第2次護憲運動が起こり、総選挙に敗れて6月辞職した

宇垣日記(大正13年刊)

「光輝ある三千年の歴史を有する帝国の運命盛衰は繋りて吾一人にある。親愛する七千万同胞の榮辱興亡は預りて吾一身にある。余は此の森厳なる責任感と崇高なる真面目とを以て勇往する。余は進取、積極、放胆、活潑、偉大の精神意気を以て邁進する。世態人情の趣向は余に此の決意を一層鞏固ならしめたり矣」

奥 保鞏(おく・やすかつ)

弘化3(1846)～昭和5(1930) 福岡県小倉藩出身。陸軍大將・元帥。日清戦争で第5師団長、日露戦争では第2軍司令官。明治39年参謀総長。44年元帥となり、軍長老として亡くなるまで軍職にあった

…… 太平洋戦争を日露戦争で戦った ……

支那事変(昭和12年)が始まったとき日本陸軍の小銃は三八式歩兵銃(昭和8年製)。命中率もよく100万挺生産されたが、30年以上も同じ鉄砲を使い続けたというのは、技術軽視以外の何物でもない。第一次大戦で自動小銃が使われ外国では自動小銃が常識になっていた。

昭和14年に九九式(昭和12年製)を採用した際、工業力が貧弱なこともあって、「弾丸の無駄遣いをするより一発必中

●陸軍部内は、「宇垣軍縮」をどう見たか？

▽西欧の軍事情勢に 精通した軍人なら

「新式装備は急務 軍縮は止むを得ない」

▽大部分の軍人は 軍人勅諭で

「兵力ノ消長ハ国運ノ盛衰」と 教えられてきた

▽河辺虎四郎中將は

「多くの連隊と軍旗がなくなり、伝統と団結を誇った兵団や部隊の解散は、各級将校に士気の沈滞を招いた」と 回想している

▽軍縮で 軍人軽視を招いたことが

「上層部恃むに足らず」と 下剋上の風潮 派閥抗争に 発展することになる

▽「山梨軍縮」は クビになった者だけが 恨んだが

「宇垣軍縮」は 残った者にも 大きな恨みを残す

▽師団には 歩兵4個連隊のほかに

騎兵 砲兵 工兵などの連隊

連隊長のイスだけでも 40近くも減った

▽「せめて連隊長が夢」だったのに その夢を奪った

●「宇垣軍縮」最大の特徴は学校教練

▽復興優先で「もっと軍隊を減らせ」の声が

高まる前に 先手を打って 軍縮をやってしまう

▽軍事教練をやって 国民の国防意識を高め

国家総動員体制を 陸軍主導で作る

陸軍独裁を狙った 政治色の強いもの

●宇垣は、大変巧妙な政治手腕の持ち主

▽大正デモクラシー 花盛りの時代

軍国主義的な 学校教練を

軍縮という 一見 平和路線に 結びつける

▽「4個師団廃止」の 見た目の大きさを

「陸軍は よくやった」と

一般社会の抵抗を そらした

▽軍縮に先立ち「陸軍現役将校配属令」(4月13日)

▽男子中等学校以上の学校に

2千人の現役将校を配属

軍事教練を 必修科目とした

▽軍縮で余る 将校の失業対策と 同時に

大隊長 中隊長要員を 定員外で温存する狙い

それも 陸軍予算でなく 文部省予算で

の訓練で十分だ」と、銃身を短くして軽くしただけ、自動小銃は見送られた。

堀毛一麿少将の話

昭和5年から2年間、ソ連に駐在した時、ソ連軍はもう戦車と重砲、低空攻撃の飛行機をセットにした立体作戦の訓練をやっていた。戦車には戦車、飛行機に対しては飛行機、ことに戦車が集団でやって来る場合には多くの飛行機で対抗しなければダメだ。

意見書を出したが、見向きもされなかったという。理屈で判っていても、金がなかった。

下村 定(しむら・さだむ)

明治20(1887)～昭和43(1968)高知県生まれ。陸軍大将。昭和3年仏・独に派遣。第13軍、西部軍、北支方面軍司令官を歴任。敗戦後は後東久邇・幣原内閣陸相として陸軍の解体を担当した

河辺 虎四郎(かべ・とらしろう)

明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生まれ。陸軍中將。駐ソ・駐独武官、航空本部次長を経て昭和20年4月参謀次長。敗戦で降伏受理打ち合せにマニラに派遣

宇垣日記(大正14年5月1日)

「今にして告白するが、今回の軍備整理は国民世論の先手を打って軍縮を断行し併せて国防力の改善を図り、軍縮と地方の休戚(きゆうせき=輻と碎)との関係的改善自覚を国民に警鐘し、及び軍民一致融和して挙国国防の端緒を開くという此の三点を狙ったものである。このことは今日まであまり世間に公言し得られざる余の胸中に潜みありし理由である。大体当初の目的を達し得たるがこれが大成は今後の大なる奮闘に待たなければならない」

●若者の心に徴兵制度の重圧

- ▽必修科目だからといって
 教員検定に 不合格になっても
 卒業できなかった わけではない
- ▽任意科目だった 大学生までが
 教員に励んだのは なぜか？
- ▽教員検定に 合格すれば
 兵役上の恩典が 与えられた
- ▽学生には 鞭で しごかれても
 このアメが 大きかった
- ▽現役徴集されれば 2年の兵営生活
 除隊しても 予備役5年4か月
 後備役10年と 兵役義務は続く
- ▽予備役の間も 1年おきの点呼
 年間35日の 演習召集があった
- ▽働き盛りの男性には 大変な 重荷だった

●ただ「国民皆兵」は建前、実際は運不運だった

- ▽徴兵検査に 合格しても
 必ず 現役徴集されたわけではない
- ▽平和な時には そんなに 兵隊は要らない
 まして 軍縮の時代 合格者の中から 籤引きで
- ▽合格者の7割は 入営しないで済んだ
- ▽社会保障の 整っていない時代
 兵隊に採られれば 収入も 仕事も失った
- ▽「甲種合格を赤飯で祝った」は 表向きのこと
 「何とか徴兵を逃れたい」と 神頼みも

●「宇垣軍縮」は、運不運の兵役制度に、教員検定に合格

- していれば必ず貰える特権、特典を盛り込んだ
- ▽昭和2年4月 徴兵令に代わり 兵役法を制定

..... 学生優遇の措置
 中学以上の在学者は、27歳まで徴兵検査が延期された。卒業後、半年以内に次の学校に入るのが条件で、徴兵逃れの受験浪人はダメ。教員合格者には、現役2年を半年短くして1年半。入営中の費用を自弁すれば幹部候補生を志願でき、幹部候補生になれば現役は1年、高等専門学校以上の学歴があれば10か月で除隊し予備役少尉になれる。2年が10か月で済むのだから

兵役法に定められた兵役義務

徴兵検査(20歳)		17歳	20	25	30	35	
甲種	陸軍常備兵役	現役2年	予備役5年4か月	後備兵役 10年			第一国民兵役 満40歳まで
	第一乙種	海軍常備兵役	現役3年	予備4年	後備兵役5年		
	第二乙種	陸軍第一補充兵役	第一補充兵役12年4か月(教育召集120日)				
	常備兵役	海軍第一補充兵役	第一補充兵役1年		第二補充兵役11年4か月		
	第二補充兵役	第二補充兵役 12年4か月					
丙種		第二国民兵役 満17歳~40歳					

徴兵令

明治6年1月10日、徴兵令を公布し常備軍制度を確立した。明治憲法20条に「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス」とあるように、戦前は義務教育、納税と共に国民の三大義務。拒否すれば懲役3年以下の罪だった。男子は満20歳で徴兵検査を受け、体格、健康の優れた者から甲種、第1乙、第2乙種までが、現役徴集される合格者。丙種は近眼など現役には向かないものの国民兵役とあって、いざという時に召集される者。そして兵役に適さない丁種不合格。

昭和2年4月1日、兵役法に改正され、17歳~40歳(昭和18年11月45歳迄)の全ての男子に兵役の義務を課した。兵役区分は、常備兵役(現役、予備役)補充兵役(第1、第2)国民兵役(第1、第2)の3種類。

陸軍の場合、現役は2年。除隊しても予備役5年4か月、後備役(戦時特例)10年の兵役義務が続いた。補充兵役は、現役に適するが現役兵員定数不足の時の要員で12年4か月。第1国民兵役は、常備兵役及び軍隊教育を受け補充兵役を終了した40歳までの者、第2国民兵役は17歳~40歳で各兵役に含まれない者。

●山県が健在なうちは、陸軍の統制はとれていた

▽山県の死(大正11年2月1日)と共に

長年の 長州全盛・専横に対する 忿懣が噴出

▽大正13年1月 清浦内閣陸相人事をめぐる

陸軍中枢を 真っ二つに割る 派閥抗争が表面化

…… 宇垣陸相は、こうして誕生した ……………

第2次山本権兵衛内閣が虎ノ門事件(概説だった昭和天皇が機嫌大崩れをされた事件)で総辞職すると、後継首相清浦は田中陸相に留任を求めたが、田中は辞退し、次官になったばかりの宇垣を推薦した。

上原元帥にとって内閣交代は、長州から陸軍の実権を奪う絶好のチャンス。早速、清浦に長崎県出身で上原派の福田雅太郎大将起用を申し入れた。これを聞いた田中は「陸相人事は大臣、参謀総長、教育総監の三長官一致の推薦を要する」とし、「三長官会議で宇垣に決まった」と回答した。上原に色よい返事をしていた清浦も困り、田中に「上原と相談して三人の候補を推薦してほしい。その中から自分が選ぶ」。

田中はこういうことにかけては策士だった。第一候補に福田、第二に福岡出身・上原派の尾野実信(おの・みのぶ)大将、第三に宇垣中将の名前を書いて上原に届けた。上原は「第三の者(宇垣のこと)、こうした年少者は今後の政局を顧みて任用しない方がよい」との但し書きつけ、候補者名簿を田中に返した。

田中は、一番手の福田を外す絶好の材料を用意していた。「甘粕事件」— 震災で不安、混乱が増大し、「朝鮮人が襲って来るぞ」「社会主義者が暴動を起こす」といったデマが飛び交い、各地に在郷軍人会、青年団、消防団による自警団が組織され、憲兵や警察も加わり、虐殺された朝鮮人は2600人を超えたといわれる。

そんな中で、麹町憲兵分隊長の甘粕正彦憲兵大尉は9月16日、無政府主義者の大杉栄と妻の伊藤野枝、6歳になる甥を憲兵隊に連行し虐殺した。新聞は「陸軍の大汚辱」と非難したが、陸軍は、甘粕の個人的犯行として処理し、戒厳司令官の福田大将を更迭しただけだった。

田中は「そんな福田を大臣にすれば議会から

大阪道頓堀でカフェーが流行し、それが東京銀座に進出してカフェー全盛時代。大正の新風俗であるモダン・ガール、モダン・ボーイの「モガ、モボの時代」。何となくふわふわした時代に、危機感を感じていた国民もいた。

竹久 夢二(たけひさ・ゆめじ) 格 茂郎

明治17(1884)～昭和9(1934) 岡山県生まれ。詩人・画家。妻をモデルに、目の大きな女性を描き夢二式美人画は明治末から大正にかけて一世を風靡した

桂 太郎(かつら・たろう)

弘化4(1847)～大正2(1913) 長州藩出身。陸軍大将。明治31年伊藤内閣陸相となり34年首相。日英同盟を締結、日露戦争を遂行した。44年再び首相に就任、韓国併合。内大臣兼侍従長を経て大正1年3度首相。第1次護憲運動で2か月で辞職

児玉 源太郎(こたけ・げんたろう)

嘉永5(1852)～明治39(1906) 周防徳山藩出身。陸軍大将。台湾総督を経て明治33年伊藤内閣陸相。36年参謀次長。日露戦争で満州軍総参謀長として陸軍の作戦を指導。39年参謀総長。在任中急死

寺内 正毅(てらうち・まさたけ)

嘉永5(1852)～大正8(1919) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。明治35年陸相。43年朝鮮総督。大正5年首相に就任しシベリア出兵を強行、米騒動で総辞職。長男の寿一は太平洋戦争の南方軍総司令官

山本 権兵衛(やまもと・こんべい)

嘉永5(1852)～昭和8(1933) 薩摩藩出身。海軍大将。明治31年山県内閣海相となり「六六艦隊」を整備。大正2年首相に就任、軍部大臣現役武官制を撤廃。12年再び首相になるも虎ノ門事件で辞職

攻撃されるのは必至だ」。清浦のバックは貴族院。清浦も衆議院と波風を立てたくない。そこで「第一位をとらないなら、第二位の尾野大將が順当ではないか」と言う。「尾野には就任の意思がない。組閣が切迫している今、時間の無駄である」と強引に宇垣起用を迫った。尾野は最初から当て馬、上原のつけた但し書きには、一言も触れなかった。

上原と田中・宇垣の対立は

3人は、陸軍の重要な政策、方針にはスクラムを組んで当たってきた。

大正政変＝明治天皇が亡くなり、元号が大正に改まると、陸軍は強硬に2個師団増設を要求した。西園寺公望内閣に拒否され、上原陸相は単独辞職、内閣を倒したが、この筋書きを書いて実行させたのが、田中軍務局長、宇垣軍事課長。長州の桂が第3次内閣を組織すると、「憲政擁護、閥族打破」の第1次護憲運動が起こり、民衆が国会を包囲、桂内閣は総辞職したが、上原は陸軍部内で「よくやった」と男を上げ、上原の下に反長州派が結集、九州閥を作っていく。

シベリア出兵＝大正7年8月、出兵を強行したのも上原参謀総長、田中次長、宇垣作戦部長だった。ところが田中が原内閣陸相になると、兵力削減、撤兵論に転じ、上原と再三衝突した。

この対立が、山県死と共に田中の流れを汲む宇垣と上原との対立となり、上原が「宇垣軍縮」に反対したのも、出発点はここにあった。

●清浦内閣は大正13年1月7日スタートしたが…

▽組閣中から 第2次護憲運動

倒閣の嵐に揺さ振られることになった

… 宇垣日記(大正13年1月6日) …

「このような時代錯誤内閣、短命を予見せられし内閣に入るのは、余個人としては迷惑至極にして辞退せんと欲せしも…利害の外に超越し犠牲的精神を基礎として、入閣を承諾す」

難波 大助(なんば・だいすけ)

明治32(1899)～大正13(1924) 山口県議会議員の家に生まれる。大正8年上京し貧民窟の実情を見て、無政府主義者に。12年12月27日に虎ノ門付近で摂政宮を狙撃。未遂に終わったが、その場で逮捕され、大逆罪で死刑判決。2日後に執行

福田 雅太郎(ふくだ・まさたろう)

慶応2(1866)～昭和7(1932) 肥前大村藩出身。陸軍大將。参謀次長、台湾軍司令官。関東大震災で、戒嚴司令官として治安対策に当たる。昭和5年枢密顧問官

甘粕 正彦(あまがす・まさひこ)

明治24(1891)～昭和20(1945) 宮城県生まれ。大正12年8月憲兵大尉の時に麹町憲兵分隊長。直後の関東大震災で、大杉栄夫妻ら3人を殺害、軍法会議で懲役10年の判決を受けた。15年假釈放となり、満州に渡って満州国建国に協力、「協和会」を結成し中央本部総務部長。昭和14年満州映画協会理事長。敗戦で自決

大杉 栄(おすぎ・さかえ)

明治18(1885)～大正12(1923) 香川県生まれ。無政府主義者。軍人の家に育ったが、名古屋陸軍幼年学校を放校され、東京外語学校卒。大正3年「平民新聞」を発刊、9年日本社会主義同盟発起人となり12年パリ・メーデーで演説。国外追放され帰国後、甘粕大尉により殺害された

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ、九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相の時、陸軍の2個師団増設要求を拒否、陸相辞職で総辞職。パリ講和会議全権を務め国際協調に努める。山県死後、最後の元老として後継首相を奏請

▽清浦は下馬評に名前が挙がると新聞記者に
「自分は七十五歳だ。そんな老人が内閣を組織する
のは時代錯誤だ。自分はそれほど耄碌していない」
ところが組閣の大命を受けると
「勅命とあらば最善の努力をする」

▽外相 陸海軍大臣以外は 全て 貴族院議員
政界 言論界は「特権内閣だ」と反発した
▽元老西園寺が 清浦を 後継首相に推薦したのは

- ・衆議院議員の任期が 5月に切れ
どの政党にも属さない 清浦の手で
公正な選挙を やらせたかった
- ・皇太子裕仁親王と 久邇宮良子女王の
ご成婚式が 1月26日に 迫っていた
この祝典が 政争などで 混乱しないよう
平穩に行ないたいと 考えた

●政友会、憲政会、革新倶楽部は10日、護憲三派連合
を結成、「清浦内閣打倒」の火の手を挙げた

▽政友会は 清浦支持派149名が脱党
政友本党を結成して 分裂したが
かえって 護憲運動を 強化させることに

▽18日には 三党首会談
高橋是清(政友) 加藤高明(憲政) 犬養毅(革新)
「憲政の本義に則り政党内閣の確立を期する」
将来も 一致した行動をとると 約束した

●総選挙は5月10日に行われた

高橋の総選挙に賭けた決意

江戸生まれの高橋は、総選挙に出馬するため
男爵を返上、原敬の遺志を継ごうと、原の故郷
盛岡を選挙区とした。政府も、三重県知事田子
一民を退官させて政友本党から出馬させ一騎
打ちとなったが、高橋を落とそうと、盛岡出身
の官吏60人を旅費は官費持ちで帰郷させ田子
に1票入れさせたという。制限選挙で小選挙区
制。60票の移動は大きかったが、高橋859票、田
子810票で、高橋49票差の勝利となった。

▽護憲三派の大勝利

286議席を獲得(憲464議) 憲政会が第1党に

宇垣の人的な欠陥

宇垣の陸軍での出世は、田中の引き
立てなしには考えられないものだった
が、日記に「全ては自分の実力である」
田中についても「上原一派の侵入
を阻止するために自分を利用して軍
部での地位を守ろうとしたのだ」「利
己本位で思ったより小さな男だ」

宇垣は昭和12年1月に組閣の大命を
受けた。しかし、目をかけた部下から
陸相就任を断られ、「軍部大臣現役武
官制」の規定に縛られて、陸相を得ら
れぬまま組閣断念に追い込まれた。

犬養 毅(ぬかいかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932)岡山県生まれ。
号を木堂。明治23年、第1回総選挙以
来当選18回。第1次大隈内閣文相を経て
国民党、革新倶楽部を率いて護憲運動、
普選運動の先頭に立つ。文相、通信相を
歴任、大正14年政界引退を表明したが、
昭和4年政友会総裁。6年首相となり、満
州事変後の政局に対処するも、五・一五
事件で暗殺される

衆議院は解散された

1月30日、憲政擁護関西大会が開かれ、
その帰途、愛知県一宮で3党首の乗った
列車が線路に並べた枕木に乗り上げる
列車妨害事件があった。翌日、衆院で緊
急質問が行われ、鉄道相が登壇すると、
猛烈な野次で立往生。清浦が「只今…只
今」と発言しかけたところへ、院外団員
2人がわめきながら演壇目がけて殺到。
議事不能となって議長は職権で休憩を
宣言、衆院はそのまま解散された。

首相が施政方針演説も出来ず、速記録
に4文字を残しただけで退陣。日本の議
会史上の珍事だった。

..... 清浦は西園寺に辞意を伝えた

「胸中光風霽月の如し」と心境を語り「近く辞表を出すつもりだ」。光風は雨上りに輝く草木の上を渡る風、霽月は雨上りに出る月のこと。何のわだかまりもないという意味だが、本音は、西園寺の慰留を期待したものだ。しかし西園寺から「辞める以上は、まず早きがよからん」と宣告され、6月7日総辞職した。

▽勅使が 後継首相について 御下問を伝えると

西園寺は 議会第1党となった 憲政会の

「加藤高明子爵然る可き」と 即答した

▽異例なことで 普通なら

「いずれ考慮の上奉答仕る可き」と 答えて

内大臣などと協議の上 奉答するのが慣例

▽西園寺は この機会に

政党内閣制度確立に 一段と

強固な基礎を作りたいと 考えていたのだ

● 6月11日、加藤高明を首相に護憲三派連立内閣

▽第2次護憲運動は

「政党内閣時代の到来」大きな時代転換

▽日本の内閣史上 初めて

総選挙で勝利した第一党の党首が 政権を担当

五・一五事件(昭和7年)で 犬養首相暗殺まで

8年近く 政党内閣制 二大政党の党首が

交互に 内閣を組織する 慣例ができた

● 功罪両面を併せ持った加藤内閣

▽普通選挙法(護憲)を 最優先の 政治課題とした

普選法成立までに

法案を枢密院(旧憲法下の天皇の顧問機関)に諮ると、次々と修正意見が出た。「25歳以上の男子に選挙権・被選挙権」を「被選挙権は30歳以上にしろ」

— これは妥協したが、「他人の救助を受ける者を除外しろ」と主張する。ロシア革命で共産主義や社会主義思想の影響を受けやすい学生排除が狙いで、「親の仕送りを受けている者は資格がない」。内務大臣の若槻礼次郎は盲腸炎で痛む腹を抑え、車で枢密顧問官を戸別訪問、

田子 一民(たご・いちみん)

明治14(1881)～昭和38(1963)岩手県生まれ。大正12年三重県知事。13年退官し総選挙に出馬したが、高橋に敗れる。昭和3年の選挙に当選、当選9回。16年衆院議長。戦後政界に復帰し、27年吉田内閣農相。全国社会福祉協議会会長

— 普選法を求める大きなうねり —

普通選挙とは、身分・教養・財産によって制限を設けず、一定の年齢に達した者全員が、平等に選挙権・被選挙権を有する制度。明治23年の第1回総選挙では直接国税15円以上を納めた25歳以上が有権者。その数わずか45万、人口の1.14%に過ぎなかった。

納税額は10円、3円と下げられたが、大地主、高級官僚、高級サラリーマンに限られ、憲政会など野党は、政友会の長期政権打破のため「普選法」をスローガンとした。大正12年2月23日、芝公園で3万人を集めた国民大会の熱気を新聞はこう伝えている。「正一時となるや四方に起る爆竹の音を出発の合図となし、旗振りながら万歳々々を連呼して徐々に出発し始めた。一番先頭には尾崎行雄、古島一雄、三木武吉の三名が自動車に乗って案内役を務め、「万機公論」「普選即行」の二大旗が後へ従ひ、楽隊の音楽勇ましく、普選を天まで届けといはんばかりに行進した。先頭が新橋駅に来た頃、最後部は漸く芝公園の会場を発した程で、実に空前の長蛇の行列」

尾崎 行雄(おざき・ゆきお)

安政5(1858)～昭和29(1954)神奈川県生まれ。号を罌堂。明治23年から昭和27年まで衆院議員連続当選25回。法相、東京市長歴任。大正政変で桂内閣を弾劾、「憲政の神様」と称された。普選運動の先頭に立ち、昭和28年名誉議員の称号

説得して回った。議長浜尾新、副議長一木喜徳郎が好意的で「救助を救恤にしてはどうか」と言う。辞典には「救恤は困っている人を救い恵むこと」。「親が子を育てるのは当然の義務で、救恤とは言わない」となり、「救恤」にした修正案は14年2月20日、枢密院で可決された。

まだ貴族院の難関が待ち構えていた。ここでまた、「救恤」が「救助」へと元に戻されたが、両院協議会で妥協が成立、普選法成立は3月29日だった。問題の「救恤」は「貧困ニ因り生活ノ為メ公私ノ援助ヲ受クル者」と、「貧困」の表現を加えることで「救恤」と同じ意味合いにした。

衆院で貴族院要求に譲ったのは、一定の居住期間6か月を1か年にしたこと、華族は貴族院に議席があるため、戸主の選挙権・被選挙権を認めないことにした、この2点だった。

▽有権者は 一挙に4倍 1240万人に
政党内閣時代と共に 日本の民主化への
第一歩となるはずだったが…

●治安維持法が普選法成立の10日前、3月19日に制定されていた

▽枢密院で可決の際 付帯決議 「教育の普及と思想の善導、国内行政の取締を充分にし、普選実施後の対策に遺憾なからしむること」

▽政府に 普選法を認める代わりに
「危険思想は嚴重に取り締まれ」と 要求した

治安維持法 (大正14年4月22日公布)

国体変革、私有財産制度の否認を目的とした結社、運動を禁止し、違反した者には10年以下の懲役また禁固。昭和3年田中内閣の時に改正され、「国体変革」の罪には死刑を適用した。

▽読売新聞は「愈々張られた治安法の大アミ
最初に何が引っかかる？」

▽最後まで反対した 星島二郎 清瀬一郎(鞆瀬郷)は
「こんな悪法が通ったら、日本はそれまでだ」

▽「暗い時代」の始まり 何でも これで引っかけ
言論弾圧 思想弾圧の武器に

古島 一雄 (こじま・かずお)

慶応1(1865)～昭和27(1952) 兵庫県生まれ。号を一念。新聞記者を経て明治44年衆院議員。当選6回。国民党、革新倶楽部に属し、犬養の懐刀として活躍。昭和7年勅選貴族院議員。戦後自由党総裁鳩山一郎の公職追放で後任に推されたが吉田茂を推薦し、その師範役を務めた

三木 武吉 (みき・ぶきち)

明治17(1884)～昭和31(1956) 香川県生まれ。弁護士を経て大正6年衆院議員に当選。憲政会に属し、野次將軍といわれた。東京市議、報知新聞社長を経て翼賛選挙(昭和17年)に非推薦で当選。戦後21年の総選挙に当選、衆院議長に就任直前、公職追放。26年解除後に自由党に復帰、河野一郎らと日本自由党を結成して反吉田「八人の侍」として活躍、29年念願の鳩山内閣樹立を果たした

若槻 礼次郎 (わかき・れいじろう)

慶応2(1865)～昭和24(1949) 松江藩出身。桂・大隈内閣蔵相を経て大正13年加藤高明内閣内相。普選法、治安維持法を制定。15年加藤死去で首相に就任、昭和2年金融恐慌で辞職。6年に浜口首相が死去、再び首相になるも満州事変勃発、8か月で辞職。戦争末期には重臣として和平派の立場。著に「古風庵回顧録」

浜尾 新 (はまお・あらた)

嘉永2(1849)～大正14(1925) 兵庫県豊岡藩出身。明治26年東大総長。松方内閣文相を経て44年枢密顧問官、東宮大夫

一木 喜徳郎 (いちき・きとくろう)

慶応3(1867)～昭和19(1944) 掛川藩出身。大隈内閣内相、文相を歴任、大正6年枢密顧問官。13年副議長、昭和9年議長

●陸軍上層部が派閥抗争に鎬を削っている間に、「陸大閥」が生まれていた

▽昭和日本を支配した 陸軍軍閥の実体は 陸大閥
満州事変を起こしたのも 支那事変
太平洋戦争へと 戦火を広げたのも 陸大出身者

陸軍大学校

参謀将校養成のため、明治16年4月12日、日本陸軍の最高学府として市ヶ谷に開校。18年、ドイツからメッケル少佐を招き、日清・日露戦争で活躍した参謀は、みんなその教え子だった。受験資格は、陸士卒業後2年以上部隊勤務をした少壮少尉、中尉に限られ、合格者は毎年40～60人、陸士各期の1割程度という狭き門。成績優秀者には恩賜の軍刀が授けられた。

陸軍省、参謀本部、教育総監部の部・課長は全員が陸大出。職務権限を握った者が、横に連絡を取り合い、スクラムを組んだのだから、陸軍を動かす大きな力を持った。

「バーデン・バーデンの密約」

大正10年10月27日、南ドイツの温泉保養地バーデン・バーデンに陸士16期の「三羽烏」、永田鉄山、小畑敏四郎、岡村寧次と、軍刀組の3少佐が集まった。日本にいた時は、土曜の夜といえど誰かの家に集まり、勉強会を開いていた仲。ロシア公使館付武官武官になった小畑が革命でロシアに入れずベルリンに留まっているところへ、ヨーロッパ出張を命じられた岡村がやって来た。スイスには、公使館付武官の永田がいる。久しぶりに会おうとなった。

大戦後のヨーロッパを見て、戦争が国家のあらゆる資源を動員しての総動員戦争になっていることを、実感していた。日本もそうした戦争に、勝ち抜ける体制を作らなければダメだ。それには、第一に陸軍を改革すること。派閥の解消、つまり長州閥を打破し人事を刷新する。ライプチヒには17期の東条英機が留学している。東条も入れようとなって、岡村が翌日東条を訪ね、同志結集の盟約が出来上がった。

星島 二郎(ほしじま・じろう)

明治20(1887)～昭和55(1980)岡山県生まれ。弁護士から政界入りし大正9年以来衆院連続当選17回。革新倶楽部、政友会に属し、戦後は吉田内閣商工相、国務相を務め、昭和33年衆院議長

清瀬 一郎(きよせ・いちろう)

明治17(1884)～昭和42(1967)兵庫県生まれ。弁護士から政界入りし、衆院当選戦前8回、戦後6回。治安維持法に反対し昭和3年衆院副議長。戦後東京裁判で東条の主任弁護人。改進黨幹事長、鳩山内閣文相を歴任し、35年衆院議長

メッケル(Klemens Wilhelm Meckel)

1842～1906 ドイツ陸軍少将。明治18年少佐の時、陸軍に招かれ来日し、軍制近代化を指導した。21年帰国

永田 鉄山(ながた・てつざん)

明治17(1884)～昭和10(1935)長野県生まれ。陸軍少将。大正2年ドイツ留学。10年スイス公使館付武官。13年陸大教官。陸軍省初代動員課長、軍事課長を歴任、昭和9年軍務局長となり、総動員体制の基礎を作る。統制派の中心と目され、皇道派相沢中佐に殺害される。死後中将

小畑 敏四郎(おがた・としろう)

明治18(1885)～昭和22(1947)高知県生まれ。陸軍中将。大正4年ロシア駐在。ロシア大使館付武官、参謀本部部長、陸大校長を歴任。二・二六事件後に皇道派として予備役。戦後、東久邇内閣国務相

岡村 寧次(おかむら・ねじ)

明治17(1884)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。関東軍参謀副長、参謀本部部長を経て、昭和13年第11軍司令官、19年支那派遣軍総司令官

…… 陸軍で偉くなるには……

「一天、二表、三敬礼、四馬鹿」— 陸大卒業生は胸に天保銭(江戸幕府天保6年作の銭)に似た、細長い楕円形の徽章をつけていた。それで、まず陸大卒であること。その徽章をつけていない者、士官学校しか出ていない者を「無天組」と言ったが、片や将軍は确实というのに、「無天組」はほとんどが部隊勤務、田舎回り。連隊長になればいい方で、大抵が大佐、中佐止まり。

陸大を出るか出ないで、陸軍での一生が決まってしまうのだから、「無天組」は、図表などを作って説明する器用さを身につけるか、規律正しい敬礼をして上官を喜ばせる。それも出来なければ、間違っても上官を批判したりしないで、愚直に徹しろ、というのだ。

●長州閥打破は、陸大から長州を締め出すことから

▽相次いで 陸大教官になった4人は

1次の筆記試験で 良い成績をとっていても

それが長州だと 2次の教官面接で

ぐんと悪い点数をつけ 落としてしまう

▽この後 長州というだけで

陸大に入れない時代が 何年も続いた

●「二葉会」から「一夕会」(いっせいかい)へ

▽永田たちは 陸士15期～18期の同志

20人ほどを集め 国策研究会「二葉会」を結成

▽満蒙問題を 話し合うようになったのは

張作霖爆殺事件(昭和3年6月4日)を 起こす

15期の河本大作大佐が 加入してから

▽昭和4年5月19日「木曜会」(20期以降)と合体

会員42人を擁する「一夕会」となった

— 大きな特徴があった —

①全員が陸大出、それも優秀な成績で卒業した者ばかり②幼年学校出身者で固めたこと。「一夕会」には中学出は3人だけ③陸軍省、参謀本部、教育総監部勤務と、エリート中のエリートを集めた④長州出身が1人もいなかった。

相沢 三郎(あいはら・さぶろう)

明治22(1889)～昭和11(1936)宮城県生まれ。陸軍中佐。歩兵第5連隊(諷)大隊長のとき皇道派青年将校の影響を受け熱狂的な同志に。真崎教育総監罷免に憤激、永田軍務局長を斬殺し銃殺刑

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官、航空総監歴任。昭和15年近衛内閣陸相となり中国撤兵に反対、16年10月陸相兼任のまま首相。19年2月参謀総長も兼務したが7月サイパン陥落で総辞職。戦後、拳銃自決を図ったが未遂。東京裁判で絞首刑に

東条 英教(とうじょう・ひでのり)

安政2(1855)～大正2(1913)盛岡南部藩出身。陸軍中将。英機の父。明治16年、陸大に入りドイツ人教官メッケルの指導を受けドイツに留学。陸大教官、旅団長を歴任し、中将に名誉進級して予備役。以後は兵学書の著述に励む

— 東条には「親の仇を討つ」

堀毛一麿が動員課勤務になった時、課長が東条で「長州閥打破には、あれが一番いい方法だった」

父英教はメッケルの教え子で、戦史研究の第一人者といわれたが性格が一本気なため長州の寺内正毅陸相に嫌われた。日露戦争で第8旅団長として出征したが、間もなく病氣帰国。戦後、朝鮮京城守備の旅団長の時、駐屯軍司令官が長州の長谷川好道大将だった。夜な夜な花街で遊び、芸者を官舎にに囲った。英教が面詰すると、名目は病気で帰国させられた。大正2年失意のうちに病死した。

青年将校英機には、人一倍「長州憎し」の気持が強かったのだろう。日露

陸軍幼年学校

明治3年兵学寮内に設置された幼年学舎が前身で、5年6月幼年学校が設立された。一般の中等教育が未整備だったため、前年、フランスから軍事顧問団を招聘したのを機会に授業は全て仏人教官により、フランス語で行なわれた。

29年5月、全国6都市(鯨、煖、砦、岫、鷗、鯨)に地方幼年学校が設立され、3年で卒業後に中央幼年学校(鯨、鯛2年)に進むことになったが、この時地方幼年学校の入校年齢が13歳に下げられ、中学1、2年修了が受験資格となった。

地方幼年学校の設立趣旨に「軍人精神は一朝一夕に能く養成すべきにあらず、宜しく幼少児童より多年の涵養薰陶を経て遂に第二の天成となり其素養の深且遠なる始めて此精神を発揚すべし」— こう謳っているように、13、4歳から共同の寄宿舎生活で軍人教育を受けているため、団結心が強い代わりに排他意識も強く、中学4、5年から陸士に入ってくる者に、「自分たちは陸軍本流だ。中学出は促成教育の将校だ」と、見下す意識があったようだ。

- 「一夕会」は第一回会合で、3項目の決議をした
- ▽「第一に、陸軍の人事を刷新して諸政策を強く進めること。第二に、満蒙問題の解決に重点を置く。第三に、荒木貞夫、真崎甚三郎、林銑十郎の三將軍を守り立てながら、正しい陸軍を建て直す」

共に総動員体制を目指したのに…

宇垣が大正15年10月、陸軍省に整備局を新設した時、初代動員課長は永田。それでいて宇垣が「一夕会」から排斥されたのは、田中義一の長州閥の跡目を継いだと見做されたから。

「一夕会」は、宇垣体制の中で孤立している荒木、真崎、林を陸軍中央の要職につけようと動くが、やがて荒木陸相、真崎教育総監の皇道派全盛時代を迎える。「一夕会」も永田、小畑の主導権争いから分裂し、統制派・皇道派の対立となって、二・二六事件につながることになる。

戦争の病氣帰国は作戦指揮が消極的でロシア軍撃破のチャンス逃したのが、左遷の理由だったといわれる。

長谷川 好道(はせがわ・よしみ)

嘉永3(1850)～大正13(1924) 長州藩出身。陸軍大将・元帥。近衛師団長、韓国駐屯軍司令官歴任。明治45年参謀総長。大正5年第2代朝鮮総督となって武断統治を行い、激しい抵に会って8年辞任

張作霖(ちやう・さくりん)

1873～1928 満州軍閥の首領。大正5年、奉天督軍兼省長となり満州を支配。9年以降中央に進出、昭和2年大元帥になって北京政府の実権を掌握した。しかし、蒋介石指揮の革命軍の北上により北京を退去、その帰途、河本大作大佐に奉天付近で列車もろとも爆殺された

河本 大作(こうもと・だいさく)

明治16(1883)～昭和30(1955) 兵庫県生まれ。陸軍大佐。大正15年関東軍高級参謀となり、昭和4年張作霖爆殺事件首謀者として停職処分を受け、翌年予備役。7年満鉄理事。18年から山西省太原の山西産業社長。24年中国共産軍に捕われ、戦犯容疑で拘置中に病死

荒木 貞夫(あらか・さだお)

明治10(1877)～昭和41(1966) 東京生まれ。陸軍大将。第1次大戦中、ロシア軍従軍武官をしてロシア通として知られ、第6師団長など歴任し昭和6年犬養内閣陸相。斎藤内閣にも留任、陸軍中枢を自派で固めた。精神主義、反共主義的言動から、皇道派青年将校から期待された。二・二六事件で予備役。第1次近衛内閣文相となり、軍国主義教育を推進。東京裁判で終身刑。病気で29年仮釈放

●「一夕会」は、陸軍の重要ポストを握って会の目標を達成しようとした

▽岡村が昭和4年8月 補任課長(大以下の人事決める)に満蒙武力解決の路線が敷かれていった

▽満州事変勃発時「一夕会」会員のポスト

- ・陸軍省=軍事課長 永田
庶務課庶務班長 牟田口廉也
作戦課兵站班長 武藤章
- ・関東軍=高級参謀 板垣征四郎
作戦参謀 石原莞爾
奉天特務機関長 土肥原賢二

●出先の軍隊が勝手に火を点けて騒ぎを起こし、拡大して行く — 戦争へと引っ張った罪は陸大閥

▽エリート選抜システムに大きな欠陥

▽陸軍中枢に進むには 陸大ルートしかなかった
結束も強い代わり 身内同士のかばい合い

▽張作霖爆殺事件で 河本大佐の軍法会議に
「二葉会」は 白川陸相を突き上げ 強硬に反対

▽天皇に 関係者の処罰を約束した 田中首相は
天皇から叱責され 内閣総辞職に追い込まれた

▽河本を 厳正に処罰していたら

満州事変も 陸軍暴走も 防げていたろう

▽幕僚の越権行為を 一度 見逃したことが
「陸軍下剋上」の 悪連鎖となっていた

●数少ないエリートだったため、失敗しても責任を問われず、またカムバックする無責任体制を生む

ノモンハン事件

日本軍は昭和14年5月から8月にかけて、満蒙国境ノモンハンでソ連軍と激突、大敗した。関東軍作戦班長が服部卓四郎、作戦参謀辻政信で、2人とも陸大の軍刀組。ソ連戦力を過小評価、些細な外モンゴル騎兵の越境事件を戦争に拡大させた2人の責任が一番大きかったが、一時的に左遷されただけ。敗戦は、第一線部隊長の指揮のまずさ、敢闘精神不足にあるとして3人に自決を強要し、責任をとらせた。

太平洋戦争開戦で服部は参謀本部作戦課長、

真崎 甚三郎(まざき・じんざう)

明治9(1877)～昭和41(1966) 佐賀県生まれ。陸軍大将。参謀次長などを歴て昭和9年教育総監。皇道派による事件が続出し10年7月更迭。以後、統制・皇道両派の対立が激化。二・二六事件の関係者として軍法会議にかけられたが無罪に

林 銑十郎(はやし・せんじゅう)

明治9(1876)～昭和18(1953) 石川県生まれ。陸軍大将。昭和5年朝鮮軍司令官。満州事変勃発で、独断1個旅団を満州に派遣し越境問題を起こす。9年斎藤内閣陸相。岡田内閣にも留任し、真崎総監を更迭して二・二六事件の端緒となる。12年首相に就任したが、7か月で辞職

牟田口 廉也(むたぐち・れんや)

明治21(1888)～昭和41(1966) 佐賀県生まれ。陸軍中将。盧溝橋事件の時の支那駐屯軍歩兵第1連隊長。昭和18年第15軍司令官となり、インパール作戦を強行、多数の餓死・病死者を出した。予備役に編入後、20年召集、予科士官学校長に

武藤 章(むとう・あきら)

明治25(1892)～昭和23(1948) 熊本県生まれ。陸軍中将。昭和12年参謀本部作戦課長。盧溝橋事件で武力解決を主張。14年軍務局長となり、近衛内閣樹立、日独伊三国同盟締結、大政翼賛会を主導。近衛第2師団長を経て、19年比島の第14方面軍参謀長。東京裁判で絞首刑に

板垣 征四郎(いたがき・せいしろう)

明治18(1885)～昭和23(1948) 岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年関東軍高級参謀となり、満州事変を起こす。13年近衛内閣陸相。朝鮮軍司令官、第17、第7方面軍司令官を歴任。東京裁判で絞首刑に

辻は作戦班長。「あいつらは出来る」と、再び中心ポストに座るのでは、「敗戦は圧倒的な火力の差」という教訓は生かされず、ガダルカナル戦でも同じ轍を踏むことになる。

..... 陸大システム欠陥の典型・富永恭次

昭和15年9月、日本軍の北部仏印進駐の際、仏印総督と平和進駐で話し合いががついていたのに、現地で作戦指導に当たっていた富永(鎌柳機長)は独断武力進駐を強行した。平和進駐では、手柄にならず、物資調達に使う軍票も使えない。一旦左遷されたが、すぐ陸軍省人事局長、東条の腹心として18年3月には次官に。

東条失脚で第4航空軍司令官(嶋)に転出したが、特攻機が出撃する際、新聞やニュース映画には軍刀を振るって見送る富永の姿が見られた。「君たちだけを死なせない。俺も後から行く」と言っていたのに、米軍の本格的な比島攻撃が始まる直前、突然首に包帯を巻き、「病氣」と称して自分だけ台湾へ逃亡してしまった。

明らかな敵前逃亡、陸軍刑法では死刑に当たる罪だが、陸軍は待命・予備役にしただけだった。結局は人がいないということで、敗戦直前の20年7月、満州の第139師団長に召集され、30年までシベリアに抑留されることになる。

●陸大教育にも欠陥があった

▽実戦にすぐ役立つ 参謀教育を重視したため
戦略・戦術69% 戦史24% 参謀要務7%

政治に関しては 何も 教えていなかった

▽軍事は 政治・外交と 密接に結びついている

▽第一次大戦で 帝国主義が 否定され

国際紛争解決の場として 国際連盟が設立

▽国際政治の流れは 常に 教えなければいけないし

大局的な ものの見方を 育てるべきだった

▽陸大では 妥協排斥を よしとした

▽政治も外交も 妥協

話し合いの中に 妥協点を見つけ

平和的解決に 持って行くのが政治

石原 莞爾(いしはら・かんじ)

明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。昭和3年関東軍参謀、満州事変を起こす。参謀本部作戦課長、作戦部長を歴任、支那事変不拡大を主張。12年9月関東軍参謀副長に転出、参謀長の東条と対立し、19年予備役。翌年立命館大教授となり東亜連盟運動を指導

土肥原 賢二(といはら・けんじ)

明治16(1883)～昭和23(1948)岡山県生まれ。陸軍大将。昭和6年、奉天特務機関長となり満州国建国など関東軍の政治謀略部門を担当した。航空総監、教育総監などを歴任。東京裁判で処刑された

服部 卓四郎(はっとり・たくしろう)

明治34(1901)～昭和35(1960)山形県生まれ。陸軍大佐。一貫して作戦畑を歩みノモンハン事件では関東軍作戦班長。昭和16年7月参謀本部作戦課長となり、太平洋戦争の主要作戦を指導。ガダルカナル敗戦で陸相秘書官に転出したが18年10月作戦課長に再任。戦後、厚生省復員局資料整理部長として戦史資料の整理に当たる。著に「大東亜戦争全史」

辻 政信(つじ・まさのぶ)

明治35(1902)～昭和43(1968)石川県生まれ。陸軍大佐。昭和12年関東軍参謀となりノモンハン事件で強硬論を主張し、敗北を招く。太平洋戦争では第25軍参謀としてシンガポール攻略に当たり華僑虐殺の責任者といわれる。参謀本部作戦班長に戻りガダルカナル戦を指導。バンコクで終戦を迎えたが、戦犯逮捕を避けるため地下に潜行して23年帰国。逃走記録「潜行三千里」はベスト・セラーに。27年衆院議員、34年参院議員。36年東南アジア旅行中にラオスで行方不明となり、43年死亡宣告

●陸大閥＝幼年学校閥の弊害も出てきた

▽幼年学校の語学は フランス ドイツ ロシア語

— ドイツ崇拜、英米軽視 —

陸大卒業生のうち成績優秀な1割ほどが諸外国に派遣されたが、ドイツが150人と圧倒的に多く、フランス90人、ソ連80人に対しイギリスは55人、アメリカに至っては40人と、アメリカに極めて薄い海外駐在システムとなった。

太平洋戦争開戦時の参謀本部で、田中新一作戦部長はソ連、ドイツ、服部作戦課長はフランス、辻は海外経験なし。アメリカと戦争をするとなった時、陸軍中枢に、その国力をよく知っている者がほとんどいない結果になった。

— 昭和天皇も指摘されていた —

昭和13年7月5日、板垣征四郎陸相に質問されている。畑俊六侍従武官長の日誌によると「陸軍の下剋上、陸軍がすべて物事を主観的に見る伝統のあること、ひいては幼年学校の要否、その教育の不備等々に関し種々御意見あり」

畑は翌日、天皇の真意を確かめたが、「ひっきょう陸軍の教育があまりに主観的にして客観的に物を観んとせず、元来、幼年学校の教育がすこぶる偏しある結果にして、これドイツ流の教育の結果にして、手段を選ばず独断専行をはき違えたる教育の外ならず」

●総力戦体制作りは、世界の指導者の常識に

▽宇垣 陸大閥が考えたような 軍事優先

軍部に都合のいい 体制作りではダメ

▽フランス首相クレマンソー(1841～1929)は

「戦争、そんな大事なことを、

軍人なんか任せておけるか」

▽総力戦なればこそ 外交は ますます重要に

まず 戦争をしないで済む 努力が必要

政治 経済 社会に 目配りし

調節して行かなければ ならない

▽それは 政治が 軍事をリードして

初めて 出来ることだった

富永 恭次(とみなが・きょうじ)

明治25(1892)～昭和35(1960)長崎県生まれ。陸軍中将。参謀本部作戦部長を経て昭和18年陸軍次官。19年第4航空軍司令官。予備役編入後、20年7月第139師団長(兼)。30年までシベリア抑留

田中 新一(たなか・しんいち)

明治26(1893)～昭和51(1976)新潟県生まれ。陸軍中将。昭和3年から3年間ソ連・ポーランド、8年からはドイツ駐在。15年参謀本部作戦部長。強硬な開戦論者。ガダルカナル戦での船舶増徴問題で東条首相と衝突、第18師団長(兼)転出

..... 幼年学校の思想的傾向

少年時代から国家至上主義的、尚武的な教育受け、志操堅固な反面、人間的な幅が狭くなり武断的傾向に走りがちになる。日露戦争後、「行け 忠勇のわが友よ 取れ 北境の蒙古の地」の軍歌を歌っていたという。その少年たちが、満州事変当時は参謀など佐官級、太平洋戦争では将軍になった。

畑 俊六(はた・しゅんろく)

明治12(1879)～昭和37(1962)福島県生まれ。陸軍大将・元帥。教育総監、中支派遣軍司令官、侍従武官長を歴任、昭和14年阿部内閣陸相。米内内閣にも留任、陸軍部内の近衛政権樹立構想を受け15年7月単独辞職し内閣を倒す。支那派遣軍総司令官を経て20年4月、本土決戦に備え第2総軍司令官。東京裁判で終身禁固刑、29年假釈放。著に「畑俊六日誌」

— 加藤友三郎の言葉 —

「国防ハ軍人ノ占有物ニ非ズ」。戦争は軍人だけで出来るものではない。だから、軍備だけでなく、民間工業力を発展させ、易を奨励し、国力を充実させておかなければならない。